

研究 報告

モモ樹内におけるクビアカツヤカミキリ幼虫の寄生状況と頭幅分布および蛹室形成位置

栃木県農業試験場 ^{はる}春 ^{やま}山 ^{なお}直 ^と人

はじめに

クビアカツヤカミキリ *Aromia bungii* (Faldernann) (以下、クビアカとする) は、幼虫がモモ、ウメ、サクラ等の生立木に寄生し、衰弱・枯死させる。栃木県では2017年にモモ産地の37%の園地で被害が確認され、1年後の18年には被害園率は76%に達し(春山ら, 2019)、その後も70~80%程度で推移している。

本虫は2~3年1化性とされ(岩田, 2018)、食害による被害をもたらす、かつ長期間におよぶ幼虫期の対策は重要である。しかしながら、樹幹内に生息し、生態に関する知見が少ないことから、適切な防除対策を推進するうえで課題が多い。被害樹内のクビアカ幼虫に対する防除対策として、モモでは樹の表面に幼虫が開けるフラス(糞と木くずの混合物)排出孔に対する登録薬剤注入や針金による刺殺・掘り取りが行われている。しかしながら、小さなフラス排出孔の発見は難しく、また、防除作業にも多大な労力がかかる。被害樹内における幼虫の寄生位置については、成虫脱出孔やフラス排出孔といった生活痕から幹の低位置で多いとされるが(加納ら, 2014; 中野・渡邊, 2017; 山本・石川, 2018)、樹全体における幼虫の分布状況は不明である。幼虫は最初に樹皮および樹皮と木部の中間部を食害し、老熟すると木部に材入して蛹室を形成する(岩田, 2018)(図-1)。このため、発育が進むと寄生位置が深部に達し、防除はより困難になる。早期の被害発見と効率的な防除体系確立のためには、モモ樹内における垂直および水平方向の幼虫寄生状況と、発育に伴う寄生位置の動態に関する詳細な知見が重要である。そこで、I株元からの距離別幼虫寄生状況、II枝の部位および直径と幼虫寄生状況、III幼虫の頭幅と樹の表面から内部に向けた寄生状況、IV木部における蛹室形成位置、のそれぞれについて調査を実施した(春山



図-1 モモ樹内におけるクビアカツヤカミキリの寄生状況
a : 樹皮内の若齢幼虫 (穿孔程度 1).
b : 樹皮と木部の中間部を食害する中齢幼虫 (穿孔程度 2).
c : 木部坑道の老齢幼虫 (穿孔程度 3).
d : 蛹室内の老齢幼虫 (穿孔程度 4).

Larvae Location and Head Width Distribution of Red-necked Longhorn Beetle *Aromia bungii* (Faldernann) inside of Peach Tree.
By Naoto HARUYAMA

(キーワード: クビアカツヤカミキリ, モモ, 幼虫, 寄生位置, 頭幅)